

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.4】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

皆様、明けましておめでとうございます。

旧年中は日本オーディオ協会に格別なるご高承を賜り、心より感謝を申し上げます。

今年は平成の世から、新しい時代の幕開けとなる記念すべき年でもあり、当協会も新しい時代とともに、より一層の発展を祈念して取り組んでいく所存です。

世界に目を転じれば、デジタルイゼーションがもたらす社会の変化のスピードや様々なイノベーション、世界各地の政治経済の不透明さも相まって、日本を取り巻く環境は、決して安泰とは言えませんが、これまで蓄積されてきた技術や知見を活かしながら、変化に適応し、持続可能な社会を実現していく可能性は無限にあると思います。

昨年6月に、前会長から引き継ぎをさせていただき、新体制での新たな一歩を踏み出しました。チームワークを発揮し、成熟した知恵と若い力のハーモニーを奏でてまいりたいと思います。今年度も、ご支援ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて新年早々悲しいお知らせではございますが、謹んでお伝えをさせていただきます。

これまでオーディオ協会だけでなく、オーディオ業界また関連の様々な分野で活躍されました、元日本オーディオ協会専務理事の渡辺 周様が、2019年1月にご逝去されました。また、元日本オーディオ協会理事、音の日委員会委員長、ジャーナル委員会委員長の森 芳久様が2018年12月にご逝去されました。

これまでのお二人のご貢献に御礼を申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

さて、連載に入りたいと思います。

私は昭和生まれの昭和な人ですから、これまでの人生の半分はアナログで育っています。もの心ついた頃、3歳のときにはレコードを触っていましたが、家のリビングにあるステレオが「オーディオ」という概念は全くなく、(もちろん 笑)、「オーディオ」と音と音楽が密接に結びついていたのは、やはり入社して音響機器の研究開発をスタートしたときです。



「オーディオ機器」が音楽を楽しむ道具として如何に重要であるか、という結びつきです。それまでは、小学校、中学校、高校、と、一番多感な時期に様々な音楽と出会いましたが、オーディオ機器については父や兄が購入する機器を、何の疑問もなく使っていたものです。もちろん、カセットテープがからみついたり、カートリッジに埃がついたり、操作が煩わしかったり、いろんな不

便や不快感もあったでしょうが、あまり気にせず、こういうものなんだという感覚で、むしろ音楽を吸収することに100パーセント熱中していました。

道具によって、獲得できる結果が違う、ということについては、スポーツは最もよく理解できました。大学時代には、バブリーな女子大生に大人気のスキーやゴルフやテニスやといった、「型」から入るスポーツも色々楽しみました。特にゴルフは父の影響で、小学生の頃から、自宅の屋上に張ってあった練習用のネットの中で母のクラブを振り回していましたから、大学入学祝いに買ってもらった新しいクラブを手にしたときには、これほどまでに道具が重要なのだと実感しました。

また、道具といえば、茶道。母が、茶道や華道が大好きで、家でもいろいろと楽しんでいましたから、大学時代に母の薦めもあって茶道を始めました。私は、お抹茶、茶懐石、和菓子、といった日本特有の食文化も小さい頃から大好きでしたが、あのお茶室の静謐とした凛とした空間のたずまいに、心が落ち着いていくのを感じ取るのをとても心地よく感じていました。



また、その空間の中で、炭のいこる時の音、茶釜の湯のたぎる音、お茶筌でお抹茶を点てる音、時折、障子の外の庭で鳥がさえずっていたり、雨の音がしたり、霧が晴れ渡るように、頭の中がすうっと清められる感覚になるのが、なんと心地よいものか、と、お稽古のたびに実感していました。床の間の掛け軸の文字、花入れの茶花、お香、何もかもが意味をもち、その意味の中から、自分自身が哲学の道を歩きながら考えに辿り着くような、そのようにして時のうつろいを楽しむ贅沢な文化をこれから先も大切にしたい、茶道だけではなく、歴史が育んできたこういった文化の精神を絶対に壊してしまってはいけない、と、学生ながらに痛感していました。会社に入ってから出会った先生は、お稽古の時でも常に本物のお道具を使わせてくださいました。先生によっては、本物のお道具は、お茶会の時にしか出しませんが、私の先生は、「日常から本物を使う、ということにこそ、お道具を大切に扱う心が芽生えてくる」とおっしゃいました。桃山時代のお茶碗、というような素晴らしいものを手にとらせていただくこともありました。時間の流れに寄り添う人の営み、歴史、時代、そういう目に見えない重みを感じとりました。お道具、という丁寧な言葉も、なるほどと思えるものでした。

ここ数年、アナログレコードにまた火がついています。面白い現象だと感じるとともに、あまりにデジタルになり過ぎた社会に、何がしかフィジカルな、実体のある安心感というものを人間の本能が求めているのだと思います。アナログレコードを楽しむ時も、いわゆる道具と所作というものが伴います。道具を愛でる、道具を慈しむ、道具を手入れする、道具を扱う、という、その時間に心と頭の中で哲学する、という風情が漂うことすらあります。それがまた至福の時間、と言われる方もいらっし



やいます。こういうところが、茶道や華道のように、オーディオ道、と言われる所以かもしれません。

さて、私が一番最初に手にしたレコードは、幼稚園のときに、真っ赤なソノシートのオバQの歌でした。その次は、ロシア民話の「せむしの仔馬」という物語と音楽と一緒に録音されたもので、その物語のバレエを観に連れて行ってもらったときに会場で買ってもらったもの。なぜか大好きで、何度も何度も聞きました。その次は、チャイコフスキーの白鳥の湖。家に、世界名曲全集というのがあって、

それを一巻ずつ取り出して眺めていましたが、白鳥の湖は、やはりバレエを観に行き、そのメロディーの美しさに感動し、家の全集を探して見つけて、これも何度も何度も聞きました。幼稚園から小学校低学年にかけての頃です。せむしの仔馬にしても、白鳥の湖にしても、なぜか、



ロシアのちょっとした悲しい曲調に心動かされていたんですね。そして、自らの意志で、このレコードが欲しい、と思った最初が、日野てる子さんの真珠貝の唄。風邪をひいて寝込んでいる私に、母が「何か欲しいものある？」と聞いてくれたとき、「日野てる子の真珠貝の唄を買ってきてほしい」と頼んだことを鮮明に思い出します。なぜ、ハワイアンだったのか、それは謎です。今なおわかりません。



次回に続く。。。